（第3種郵便物認可）　日本教育新聞

中学英語の「ルビふり教科書」作成

福井県立ろう学校・羽柴教諭ら

生徒の学習意欲が高まる

音声を通じた学習に困難さを抱える、聴覚障害のある生徒たちが英語を学ぶ際のハードルを下げるため、福井県立ろう学校の羽柴直弘教諭が中心となり、中学校教科書の英単語にカタカナで読み仮名を載せた「ルビふり教科書」を作成している。既に完成した1、2年生分は4月中に、同校のホームページで教材へのリンクを公開する。

同校の中学部と高等部で英語を担当する羽柴教諭は、赴任して5年目。以前に勤務した高校や病弱・肢体不自由の特別支援学校では、生徒が音声を聞きながら英単語や英文を学ぶ活動を多く取り入れてきた。

しかし、聞こえの状態がさまざまな子どもたちが在籍する同校に着任すると、「聴覚に障害のある生徒が、英単語や英文を音声と結び付けるのは非常に困難」と実感したという。さらに、聴覚障害児は聞き取りによる理解が極めて難しいことに加え、発音が不明瞭であることへの苦手意識から、モチベーションを高めたり、コミュニケーション能力を身に付けたりする難しさもあった。

赴任以来の授業では、英文や新出単語の上にルビを振ったプリントを配布したり、板書した英文に読み方を示したりして指導を行ってきた。

生徒たちは次第に英語を声に出して読めるようになり、練習を繰り返して英語の文字と音声が身に付いていた。一方、教材の準備には労力がかかった。授業中に板書したルビを生徒が書き写す作業にも時間が必要で、音声の確認に終始してしまうこともあり、常に教員・生徒双方にとって効率の悪さを感じていたという。

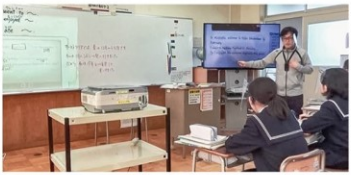
英単語に読み方を記載した「ルビふり教科書」

音読やペア活動で積極的に

そこで、令和3年度の中学校の教科書改訂に合わせて、昨年から羽柴教諭が取り組み始めたのが、オリジナルの「ルビふり教科書」の作成だ。生徒たちが英語を音として捉えるためには、『good』を『グッド』というように、教科書に読み方を書くのが一番だと考えた」と話す。

羽柴教諭は昨年の夏休みを利用し、1年生のルビふり教科書を作った。教科書の発音記号や辞書を参考にしながら、一語ずつ読み方を記入した。

昨年9月の2学期から授業でルビふり教科書を活用すると、生徒たちは音読やペアでの活動に積極的に取り組んだ。大きな声を出して英語を読む姿が見られ、英語の歌も歌うようになった。「生徒たちの学習意欲や興味・関心が驚くほど高まった」と羽柴教諭は語る。


「ルビふり教科書」をモニターに映し出して授業を行う羽柴直弘教諭

授業でルビふり教科書を使う場合には、生徒たちが前を向いて教員の手話や口元と同時に見られるよう、大型テレビのモニターに映し出して指導する。紙媒体では、昨年の夏休みに加えてタブレット端末などで使えるデジタル版も配布し、家庭学習でも活用できるようにした。

学習が進み、英単語や英文が音声と結び付いた段階で、最終的な目標はルビのない教材を使うこと。授業では生徒の実態に応じてルビを外したり付けたりしながら指導している。

教材データへのリンク 学校HPで順次公開へ

自分だけではなく、聴覚障害児が通う特別支援学校の英語科教員は同じ悩みを抱えているのではないかと考えたのがルビふり教科書作成のきっかけ。

こうした課題意識の下、新潟県、富山県、石川県、福井県の北陸4県の教員10人を対象に昨年9月に行ったアンケート調査では、「新出英単語にルビを打っている」が9人、「英語の本文にルビを打っている」が7人に上った。

その上で、9人が「ルビ教材があった方が良い」と答えた。理由には「発音指導がしやすい」「生徒が家庭学習で音読や発音の確認がしやすいなども挙げた。

昨年1月からは、県内に住む英語ネーティブら約10人の有志に協力してもらい、2、3年生分のルビふり教科書を作り始めた。1年生分と2年生分は出来上がっており、3年生分は現在、完成を目指して作成中。誰でも使えるように、同校のホームページで順次、完成した教材データへのリンクを公開する予定だ。

羽柴教諭は「言語は黙って文字を見るだけでは習得できず、声に出してアウトプットしながら身に付いていくもの」と指摘する。

「ルビふり教科書は、聴覚障害児が言語を学ぶ上で『聞こえにくさ』というハードルを解消するための教材。全国の先生方にもぜひ活用してもらえれば」と話している。